

2019年

5月10日

第326号

ゆうあい通信

発行所 石井記念友愛園

宮崎県児湯郡木城町椎木 644 番地 1

〒884-0102 TEL 0983-32-2025

## 和の再生

園長 児嶋 草次郎

目に染（し）みる青葉・若葉、光につやつやと輝きながら、春風にゆったりとそよいでいます。そのむこうの空では、約150匹のこいのぼりが、田植えの終わった水田に自らの勇壮な姿を映しながら、風に向かって元気に泳いでいます。2、3日の雨でこの大地の汚れもすっかり洗い落され、天はどこまでも澄み渡り、茶臼原は令和な空気に包まれています。

今年の田植えは、4月30日、5月1日の2日間で行いました。あいにく2日間とも雨でカッパを着て作業をすることになりましたが、かえって子供たちの気力・協力は集中・充実し、正確には一日半で終わることができました。

友愛園の田植えは、3月1日に種籾（もみ）を水につけることから始まります。芽出しをして、3月16日に水田に播き、ビニールで被（おお）い、苗を育てます。1か月半ほどで10cm～15cmほどに成長した苗を、小6、中1、中2生たちが職員たちと一緒に苗床からはぎ取るように抜いて、手で握れるほどに束ねて藁（わら）で結んでいきます。それらを代かきの終わった水田に投げ込んで、中3以上の上級生たちが植えていきます。

苗の植え方については、私が直接指導します。今年にはリョウ、セイヤ、カケル、ケイテツ、ミナミ、アヤカ、レイナの7名が新たに加わりました。植え方の要領をつかむまで少々厳しく指導が必要ですが、そのうちコツをつかむと自主的にどんどん植えていけるようになります。こうなると、少年から青年に脱皮するがごとく、自信もつけてこれを機に大きく成長していきます。そして誇りも生まれ始めます。下級生たちの苗取りも大事です。両者のコンビネーションがうまくかみ合った時、田植えはスムーズに進行していくのです。中腰で何時間も苗を取り続ける作業、植え続ける作業は大変で、忍耐力、集中力を必要とします。子供たちには、竹の節を自分の中に作るようなものだと説明しています。「なにくそ、なにくそ」とかんばることで、我慢する力（忍耐力）、精神力は身についていくのです。今年の田植えを通して、皆、一節成長しました。竹は節があることで、台風が来て大きくしなりながらも折れずにすむのです。

さて、今回は「和の再生」という題で書かせていただいています。石井十次の言わば「和」の再生ではないかと感じさせられるような出来事がありました。

4月22日、Sさんと名乗られる高齢の方が妹さんと一緒に来訪されました。事前に電話で事情は聞いています。自分たちの祖父・祖母の戸籍がよく分からない。もしかして、石井十次先生に連れられて茶臼原（宮崎）に来たのではないか、そんな内容であったと思います。きわめて個人情報に関する事なので、電話では答えられない、直接お会いしてお話を聞きたい、そんな風に答えておきました。このような問い合わせは、今までも何度があり、お会いして感じるのには、「なつかしさ」みたいな感情です。遠い親戚を迎えた時のような気持ちです。私は石井十次の末裔ですが、同じ志を持ち、同じ夢を追った大家族の方々は、血はつながってなくとも魂は一緒であり、その志を引き継いでいるものとして、とても他人とは感じられないのです。この“再会”によって、当時の大家族の和が再生するとすれば、石井記念友愛社としても、これ以上にありがたいことはありません。

私はSさんの電話の丁寧で真摯な口調に関係者に間違いないと直感し、石井十次資料館で調べて、Sさんと妹さんをお迎えしました。

お二人とも温和な方で、安心しました。お二人は祖父・祖母様の戸籍謄本を示されましたので、私は調べた結果について報告させていただきました。祖父S・S様は、京都市出身で明治24年10月20日の入所、当時10歳であったようです。戸籍には載ってなかったのですが、6歳下の弟がおられ、入所当時4歳、院内で亡くなられていることも分かりました。

一方祖母N・S様は、大阪府出身。入所は明治24年2月28日となっていますが、年齢の欄は空欄となっていました。戸籍には推定として明治19年生まれとなっていました。5歳くらいの時に入所ということになります。明治24年と言えば、岡山孤児院が始まって（明治20年）間もない頃であり、院児数もまだそんなに多くなく（130名程度）、石井から直接指導を受ける機会もあったと思われます。その後、お二人の入所に関して「石井十次日誌」にも出ていることが分かりました。

そして、明治27年、S・S様は茶臼原に理想郷を作るべく編成された開拓第一陣（25名）に選ばれ、岡山から宮崎に移住してこの茶臼原大地と格闘します（13歳）。石井は走りながら考える人であり、まだこの時点ではその理想郷は具体化したものではありませんが、若者たちは、明治維新後掲げられた「殖産興業」に燃えていたものと思われます。ちなみに、昭和の敗戦後の生きるための開拓とは、その動機や理想が随分違うということを感じています。

その後、その理想郷は、里親村構想へと発展していきます。つまり、子供たちを茶臼原に農家として独立させ、そこに新たな孤児をあずかってもらおうと考えたのです。これは脱施設化であり、今の社会的養護・養育思想にも通用する画期的な考

え方でした。石井は亡くなる時、職員や卒院生たち一人ひとりが石井になって志を引き継いでほしいと願いました。同じ魂を有し、同志として職員や卒院生たちを見ていたのです。このような発想は、人種、国籍、身分に関して差別意識の強い欧米人にあまりできるはずもなく、日本人特有の大和の感性と私は呼びます。まあ、吉田松陰が教え子たちを見つめるような眼差（まなざし）と言ってもよいでしょう。

S・Sさんもその一人です。S・Sさんはこの茶臼原に農家として独立。その前後にN・Sさんと結婚（明治39年）、ともに理想郷建設のためにこの大地と戦いました。ところが、その後まもなく、石井十次はこの世を去ってしまいます（大正3年）。まだ48歳でした。残された人々は、それから運命に翻弄されながら生きていくしかありませんでした。互いを支えていた和・輪が崩壊してしまい、一農家として自立していくにおいて、随分御苦労されたわけです。

Sさんは、祖母のN・S様について、クリスチャンで上品な感じの人だったというように言われました。きっと石井十次の弟子であることに誇りを持って生きていかれたに違いありません。しかし残念なのは、当時、偏見や差別意識の強い時代状況だったということです。一般の人々より高いキリスト教的教養と文化を身につけているのに、「コジイン！」等と馬鹿にされたりしたのです。実際にこの地域の老人から、その苦労話を直接お聞きしたことがあります。結果的に石井十次の下で学んだということは禁句となり、封印されることになります。岡山孤児院出身の多くの方が、家族にもそのことを告げず生きていかれたのだと思います。

そしてたくさんの方が、こうしてSさんと妹さんが訪ねて来られたのです。福沢諭吉や大隈重信が歴史にしっかり名を残しているのは、その下で学んだ人たちが「偉い、偉い」と繰り返し顕彰したからでしょう。教育という次元から今風に考えるならば、落ちこぼれた少年・少年たちを集め、彼らに最高の教育を授けようとした石井十次の教育の方がよほど価値のあることだし、ある意味福沢や大隈より偉いと言えるのですが、悲しいのは、それを顕彰すべき教え子たちが口を閉ざさるを得なかったということです。

しかし、葛藤があつたとしても、一度は胸に抱いた矜持（きょうじ）を捨て去ることはできないはずです。DNAのごとく、何らかの形で子や孫に伝わっていくのではないかと私は思っているのです。

話は脱線しますが、NHKテレビで「ファミリーヒストリー」という番組があります。芸能人等のルーツ探しをNHKが代りにやり、自分の才能や資質の原点とも言える御先祖に行きつくと、感動の涙を流すというような内容です。私は密かに楽しみにしていることがあり、それはあの岡山孤児院「少年音楽隊」の末裔が現在東京近辺（もしかしたら世界で）活躍されていて、その人に行きあたり、音楽の文化

で時代を先取りした「少年音楽隊」の存在が明らかになっていくことです。

私は以上書いたようなことを S さん御兄弟にお話しさせていただきました。そして、石井十次映画「石井のお父さんありがとう」の DVD を一つプレゼントさせていただきました。こうして訪ねて来てくださることが、わたしにとっては、石井十次の和・輪の再生につながっていくことであり、石井記念友愛社の理念を次の世代につないでいく支援の和作りの為にも大切なことだからです。S さん御兄弟はすぐに後援会「石井十次の会」にも入会くださり、御寄付までくださいました。ありがとうございました。二千数百人の卒院生の方々は、おそらくもうこの世にはおられません。子や孫や曾孫まで含めると、数万人規模にその魂を受け継ぐ人は増えていると思います。今回、そのルーツ捜しに御決断された S 様御兄弟に感謝しながら、迷っておられる方にこのために、こうしてこの出来事を紹介させていただきました。

石井十次はグローバルな視野の中で日本の社会的養護の子供たちの教育と自立を高いレベルで考えたのであり、その下で養育と教育と受けることができたことは最高に幸せなことであったと思います。西郷隆盛や吉田松陰の弟子たちがそうであったように、強い誇りと強靱な気概をもっておられたに違いありません。

私は、この5月6日で70歳を迎えました。孔子の言葉を借りれば「七十にしてこころの欲する所に従って、矩（のり）をこえず」の心境のつもりです。神より与えられたこの世での働きがあと何年残っているのかわかりませんが、その使命を一つ一つ丁寧にはたしていきたいと思います。皆様にはご迷惑をおかけするばかりですが、御指導・御支援、引き続きよろしくお願い致します。